



『デ・スタイル』誌の構造的変化について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-12-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 本田, 昌昭, 渡部, 慎也 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00007763

『デ・スタイル』誌の構造的変化について

本田昌昭・渡部慎也*

On Structural Changes of The Magazine *De Stijl*

Masaaki HONDA* and Shin'ya WATANABE**

ABSTRACT

The magazine *De Stijl* was first published in Leiden, Netherlands in 1917. In spite of its important roles in Modern art, little attention has been paid to this magazine, even in Europe. This paper tries to clarify structural changes of this magazine between 1917 and 1932, through an analysis of quantitative data, such as types of contributions and the number of contributors, in connection with *De Stijl*. As a result, our quantitative analysis shows a number of reasons for the opinions which are generally accepted but not demonstrated.

Key Words: Netherlands, Piet Mondrian, van Doesburg, Modern art

1 研究の背景

1917年10月、オランダのレイデン(Leiden)において『デ・スタイル(De Stijl)』誌⁰¹は、創刊される。この雑誌は、1910年代後半から20年代にかけての数年間、オランダ芸術界において、新しい造形表現を追求する芸術家たちの模索と創造の場として機能することとなる。この運動にとって必要不可欠な人物としては、新造形主義(ネオ・プラステイシズム(Neo-Plasticism)⁰²)の創始者であった偉大なる前衛画家ピート・モンドリアン(Piet Mondrian [1872-1944])と、先鋭的な芸術家であり活動家であったテオ・ファン・ドゥースブルフ(Theo van Doesburg[1883-1931])の名が常に挙げられる。

デ・スタイル・グループのメンバーと目された芸術家とは、ある時期、新造形主義もしくは、ファン・ドゥースブルフと関わりを持ち、かつ『デ・スタイル』誌に寄稿した人たち全体を指すと言える。また『デ・スタイル』とは、画家として出発したその創立者ファン・ドゥースブルフが、モンドリアンの提唱する新造形主義を支柱とし、節目ごとに随伴者からの刺激を吸収しつつ、真に造形的な芸術としての建築の具現へと向かった14年間の活動そのものを意味していると言えるのかもしれない。ファン・ドゥースブルフは、1917年の雑誌創刊からその死に至る1931年までの間、雑誌『デ・スタイル』の編集者であると同時に、デ・

スタイル・グループの推進力であり続け、このグループの活動をオランダ国内から国際的な影響力を持った活動へと飛翔させることとなる。

1920年12月にファン・ドゥースブルフはバウハウスを訪れ、さらに1921年には住まいをヴァイマールに移し、その翌年には若い芸術家を対象とした「デ・スタイル講座」を開講することとなる。その講座は好評を博し、バウハウスの学生たちは、「デ・スタイル」の理念に触発されて、ヴァイマール宮廷劇場のバルコニーや壁にペンキを塗り付ける事件を起こすほどの熱狂ぶりであった。当時、ファン・ドゥースブルフの最も熱烈な信奉者であり、この事件の首謀者でもあったバウハウスの学生ペーター・レール(Peter Röhl)は『デ・スタイル』誌上で自らの行為について以下のよう

に述べている。
「劇場は色鮮やかに輝いている。あふれ出る色彩は、その統率者、テオ・ファン・ドゥースブルフ画伯に敬意を表する旗印かと思まごうばかり。一つの心に固く結ばれた力。新しい世界の精神は、新たな指導者である友人に挨拶を送っているのだ。」⁰³

この出来事に加えて、バウハウスが啓蒙的意味を込めて出版した叢書の11人の執筆者の中に、バウハウスの教官に混じって、モンドリアン、ファン・ドゥースブルフ、J.J.P.アウト(Jacobus Johannes Oud [1890-1963])といったデ・スタイル・グループを代表する3人の人物が名を連ねていた⁰⁴ことは、このグループとバウハウスの影響関係、延いては「デ・スタイル」のヨーロッパ的影響力を物語っているように思われる。

このように、今世紀初頭においてオランダ国内にとどまらず国際的影響力⁰⁵を持ち得たにもかかわらず、

1996年4月10日受理

* 建設工学科 (Department of Civil Engineering)

** 株式会社 森組 (Mori Corporation)

ヨーロッパにおける『デ・スタイル』誌に関する研究は、モンドリアンという著名な画家を通じたものでしかなかったり、そこに掲載された作品が独立した事象として取り扱われてきたにすぎず、雑誌そのものの意味が問われることは希有であった⁰⁶。

2 研究の目的と方法

本稿は、寄稿形式の分布、また寄稿者とその寄稿回数といったある種定量的に取り扱うことが可能と思われるデータ⁰⁷を分析することによって、『デ・スタイル』誌の構造とでもいべき部分について、その把握に努めるものである。尚この研究は、今後の詳細にわたる『デ・スタイル』誌研究を進めていく上でその基礎となるものであり、またその研究を通じてこそ意味を生ずるものであると考える。

まず本稿では、寄稿形式毎の寄稿数を年毎に集計、整理し、その経年的変化を考察している。このことは当初ファン・ドゥースブルフを中心としたデ・スタイル・グループの芸術家によって自らの芸術理論をプロパガンダする場として考えられていたこの『デ・ステ

イル』誌が、どのようにその役割を変化させていったかを明らかとする上で、その指針を投げ掛けることとなるであろう。

次に本稿では、この雑誌への寄稿者、及びその寄稿回数の経年的変化を考察することによって、真にデ・スタイル・グループという名に相応しい集団がそこに形成されていたかについて考究している。先に言及した通り、デ・スタイル・グループとは、『デ・スタイル』誌への寄稿を通じてそこに緩やかな結びつきを保持した人々を指すと考えられている。ここでは寄稿回数という数値をもとに、寄稿者とこの雑誌との関わりを測ることによって、例えば一般的にその成員とされてきた、モンドリアンやアウト、G.リートフェルト(Gerrit Rietveld [1888-1964])といった芸術家や建築家が、果たして真にデ・スタイル・グループのメンバーと呼び得るかについて資料を提供するものである。

3 寄稿形式毎の寄稿数の経年的変化について

まず、全掲載寄稿数に占める各寄稿形式毎の寄稿数の割合(表1)について見ていくこととする。1917

表1 各寄稿形式毎寄稿数の経年的推移

	論説	通知	批評	図版	雑録	詩	手紙	対話篇	引用	散文	対話篇 (3人)	召集	宣言文	追悼文	広告	報告	解説	概観	図表	開会の辞	声明文	布告文	合計	
1917	9	2	2	7																				20
(%)	45.0	10.0	10.0	35.0																				
1918	40	3	4	23	11	1	3		2				4	1										92
(%)	43.5	3.3	4.3	25.0	12.0	1.1	3.3		2.2				4.3	1.1										
1919	36	14	1	32	7		2	2	9	1	6	1	1	1										113
(%)	31.9	12.4	0.9	28.3	6.2		1.8	1.8	8.0	0.9	5.3	0.9	0.9	1										
1920	12	17	15	12	15	3	1		5		7		4											91
(%)	13.2	18.7	16.5	13.2	16.5	3.3	1.1		5.5		7.7		4.4											
1921	17	17	20	27	14	23	1		3				7		2					1				132
(%)	12.9	12.9	15.2	20.5	10.6	17.4	0.7		2.3				5.3		1.5					0.8				
1922	20	9	6	42	16	2			14				3		1	1	6				1	1		122
(%)	16.4	7.4	4.9	34.4	13.1	1.6			11.5				2.5		0.8	0.8	4.9				0.8	0.8		
1923	13	5	1	15		6			2															42
(%)	31.0	11.9	2.4	35.7		14.3			4.8															
1924	5	4		17	1			1					2		1									31
(%)	16.1	12.9		54.8	3.2			3.2					6.5		3.2									
1924/25	8	2	2	19	3	1	1		1			1	1				1							40
(%)	20.0	5.0	5.0	47.5	7.5	2.5	2.5		2.5			2.5	2.5				2.5							
1926	4			12		2																		18
(%)	22.2			66.7		11.1																		
1926/27	5	5	1	18	1	15			1	3														49
(%)	10.2	10.2	2.0	36.7	2.0	30.6			2.0	6.1														
1927	4	2	2	66	14	5	1		3	1			1					1	2					102
(%)	3.9	2.0	2.0	64.7	13.7	4.9	1.0		2.9	1.0			1.0					1.0	2.0					
1928	3	2	4	30	2	5				1														47
(%)	6.4	4.3	8.5	63.8	4.3	10.6				2.1														
1932	3		1	17	14	1			2	1														39
(%)	7.7		2.6	43.6	35.9	2.6			5.1	2.6														
合計	179	82	59	337	98	64	9	3	42	7	13	2	23	2	4	1	7	1	2	1	1	1		938
(%)	19.1	8.7	6.3	35.9	10.4	6.8	1.0	0.3	4.5	0.7	1.4	0.2	2.5	0.2	0.4	0.1	0.7	0.1	0.2	0.1	0.1	0.1		

年から16年間にわたって出版された『デ・スタイル』誌の全掲載寄稿数は、1000近くにのぼる。その中でも際だって大きな比重を持つものが、「図版」(35.9%)である。続いて、「論説」、「雑録」、「通知」がそれぞれ、19.1%、10.4%、8.7%を占めている。「通知」が4位に位置している事実は、この雑誌が前衛芸術家のためのコミュニケーションの場として機能していたことを示唆しているように思われる。この雑誌を通じて多くの情報交換がなされたことであろう。またこの後に続く「詩」(6.8%)の存在は、視覚芸術という表現媒体と共に、言葉による表現が模索されていたことを我々に示している。このことは、『デ・スタイル』誌を強く特徴付けていると思われるが、そこには、このグループが多なる影響を受けたとされている未来派の影を見ることが出来る。年毎の寄稿数の合計を見れば、1922年と23年の間には数において断層とも思える明らかな差が存在し、この雑誌が1922年までに一つの役割を終えたことが推測される⁹⁸。

寄稿形式毎の寄稿数の経年的な変化を追っていくと、創刊年、及びその翌年の1918年では、「論説」の割合がそれぞれ45%、43.5%を占めており、その重要性が窺われる。それは、『デ・スタイル』誌が当初、ファン・ドゥースブルフを中心とした造形表現を追求する芸術家たちによって、自らの芸術理論をプロバガンダする場と捉えられていたことを考えれば当然のこ

とと言えるであろう。さらにはこの「論説」の比重の大きさは、創刊直後の時期彼らが言葉によって雑誌の進むべき方途を表明しようとしていたことを物語っているように思われる。また「図版」、つまり彼らの作品がそれぞれ、35%と25%というように「論説」に次ぐ割合を占めていたことは、彼らの理論が常に創作と共にあったことを裏付けている。理論は実践と共に存在したのである。その後も、「論説」がこの雑誌から姿を消すことはなかったが、創刊当初ほどの比重を再び占めることはなかった。それに対して1922年以降「図版」は、30%を切ることはなく、このことは彼らの示威行為が作品にウエイトを置いたものへと移行していったことを意味している。1921年には、「詩」が「図版」に次いで大きな比重を占めているが、これは、ファン・ドゥースブルフのダダイズムへの陶酔⁹⁹

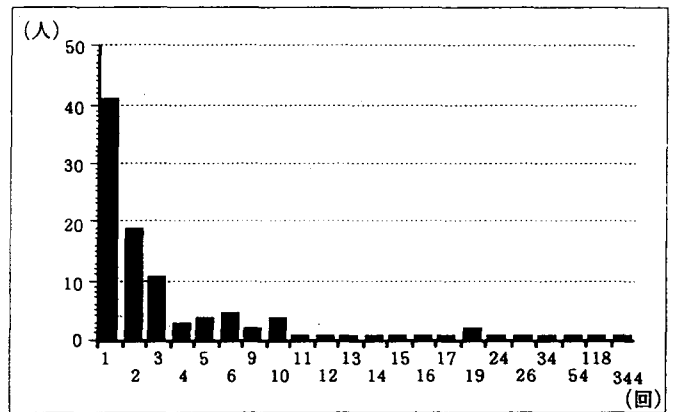


図1 寄稿回数による人数分布

表2 寄稿者別寄稿数の経年的推移

	1917	18	19	20	21	22	23	24	24/25	26	26/27	27	28	32	合計
Anthony Kok	2	2	2		1	1						1		1	10
De Stijl		4			3				3						10
Hugo Luck											10				10
Jan Wils		3	4			2						1			10
C. van Eesteren									5		1	3	1	1	11
F. Kiesler									7		2	2		1	12
Doesburg-Eesteren								8	2	1		1	1		13
G.Rietveld			3	1		3	2				2	3			14
Hans Arp									2	2	4	3	3	1	15
Anthology-Bonset						16									16
G. Vantongerloo		5	6	2		1						3			17
Robt. van't Hoff		1	12			1						3		2	19
V. Huszar	2	8	2		2	7						3			24
J. J. P. Oud	3	5	8	2		1						5		2	26
I. K. Bonset				5	8	3	7			1	4	3	1	2	34
Piet Mondriaan	2	12	10	9	5	5	3	3			2	3		1	55
T. van Doesburg	2	11	19	8	8	9	3	2	8	6	6	3	16	17	118
Redactie	3	17	40	52	64	72	15	12	3	2	6	47	8	4	345

が関与していたと考えられる。1920年以降彼は、I.K.ボンセット(I.K.Bonset)というもう一つの名前を用いて、ダダイストの詩人としての活動を開始しているが、そのような彼の詩への興味が多数の詩をこの雑誌に掲載させる結果を招いたのであろう。またこの時期は、創刊当初の中心メンバーと称される芸術家の多くがこの雑誌を去った時期¹⁰と重なっており、詩に典型的に現れたファン・ドゥースブルフの創作における破壊的な傾向が、仲間と袂を分かち誘因となったことが窺われる。あるいは、この時期あたりからファン・ドゥースブルフによる『デ・ステイル』誌の私物化が表面化していったのかもしれない。

4 寄稿者、及びその寄稿回数の経年的変化について

図1は、『デ・ステイル』誌に掲載されたすべての記事を寄稿者別に集計し、寄稿回数毎の人数を示したものである。16年間の間に延べ104人の寄稿者¹¹が、この雑誌に寄稿しているが、図1から明らかなように、1回だけの寄稿が全体の約4割を占め、さらに寄稿回数2回までを含めればその割合は6割近くにのぼる。これは、この雑誌の一つの特徴と言えるであろう。すなわち半数以上の寄稿者が、1回もしくは2回の寄稿しか行わず、残り44人の寄稿者がほとんどの記事を投稿していたことになる。ただし10回以上の寄稿を行った者も、わずか18人(表2)であり、さらにそこから、編集者、デ・ステイル・グループとしての寄稿、共同執筆による重複を除き、ボンセットをファン・ドゥースブルフに含めて考えれば、その数は13人ということになる。この13人に注目すれば、その内の7人、つまりはファン・ドゥースブルフ、モンドリアン、Kok, Vantongerloo, Wils, van 't Hoff, Huszar は、1918年11月号に掲載されたデ・ステイル・グループの最初のマニフェストに署名していた芸術家であった。その署名という行為からも、彼らが初期デ・ステイル・グループの中心メンバーであったことは明らかであるが、加えて今回の寄稿回数の分析は、この雑誌に占める彼らの重要性について明確な根拠を示し得たと思われる。また、マニフェストにはサインしなかったものの初期『デ・ステイル』誌において中心的な役割を果たしたと考えられているアウトが、ファン・ドゥースブルフ、モンドリアンに次いで寄稿回数が多かったことは、当然のことと言えるだろう。

編集者とファン・ドゥースブルフの寄稿回数が、他の寄稿者のそれと比較して群を抜いていることは、単発の寄稿が多かったことと並んで、この雑誌を特徴付けているように思われる。編集者とは、すなわちファ

ン・ドゥースブルフと同義であり、それにボンセットさらには van Eesteren との共同作業を含めれば、表2にあるだけでも、彼が関わった記事は529件に上り、これは全体の約56%を占めることとなる。この他にも、彼はアルド・カミーニ (Aldo Camini) という名を用いて執筆活動を行っていたし、van Eesteren 以外にも連名で寄稿していたことを考えれば、『デ・ステイル』誌とはファン・ドゥースブルフという一人の芸術家の個人的な雑誌、あるいは、『デ・ステイル』という運動自体がファン・ドゥースブルフの個人的な創造活動であったと言えるのかもしれない。

5 おわりに

本稿では、『デ・ステイル』誌という雑誌を定量的に分析することによって、その構造に迫ることを試みた。当然のことながらこの類の研究において、数字からすべてを結論付けることが不可能なことは言うまでもない。それ故考察の大部分が、確認という作業にとどまったことは事実である。しかしそれは、今まで根拠不明瞭なまま繰り返し言及されてきたこの雑誌をめぐるいくつかの定説に対し、一つの根拠を示すことになったと考えられる。

註

- 01: 『デ・ステイル』誌の出版は、1917年10月より1932年にかけて行われた。創刊号より1922年までは、ほぼ毎月出版されたが、1923年以降は、不定期な出版となる。発行は、途中数号(1922年2月号~1923年4月号(Den Haag))と特別号(Meudon(France))を除いて、オランダのレイデンで行われた。雑誌の体裁は、最初の3巻(1920年11月号まで)が縦型、その後は横型(1921年1月号以降)で、サイズは18.5cm×24cmから27cm×22cmの間で一定していない。
- 02: ネオ・プラステシズムとは、20世紀初頭のオランダにおいて「色彩と線の純粋な関係を主張し、その純粋性が普遍性に通ずるものとして、絵画、彫刻、デザイン、建築を同じ原理で統一しようとした」芸術運動を言う。(『新潮世界美術辞典』, p.741, 新潮社, 1985.)
- 03: ドロスデ, M.: 『バウハウス 1919-1933』, Mariko Nakano 訳, p.56, ベネアクト・タッセン社, 1992.
- 04: ファン・ドゥースブルフ, Th.: 『新しい造形芸術の基礎概念』, 宮島久雄訳, 中央公論美術出版, 1993. モンドリアン, P.: 『新しい造形(新造形主義)』, 宮島久雄訳, 中央公論美術出版, 1991. アウト, J.J.P.: 『オランダの建築』, 貞白博幸訳, 中央公論美術出版, 1994.
- 05: 日本でも、1923年に堀口捨己はオランダを訪れ、アウトの作品等に触れ、その重要性を日本に紹介している。
- 06: 当然のことながら、日本におけるこの種の論考は皆無と言える。ただ、エッセイ等において一面的ではあるが、この雑誌に関する部分的な考察を見出すことはできる。参考までに、以下にその一例を挙げる。
①佐々木宏: 『二十世紀の建築家たちII』, 相模書房, 1976.
②『アヴァンギャルドイデオロギと今日 ロシア構成主義, イタリア未来派, デ・ステイル』, 『都市住宅』, pp.13-60, 1986.2.
- 07: 『デ・ステイル』誌に関するデータは、Bach Kolling-Dandrieu, H., Sprengel-Horn, J.: *Index op De Stijl Inhoud en register op namen en trefwoorden*, Van gennep Amsterdam, 1983.による。なお寄稿形式の分類も、この資料に準じた。
- 08: 創刊年の1917年の寄稿数が少ないのは、創刊号が10月に発刊され、この年は創刊号をあわせて2号しか出版されなかったことによる。
- 09: 例えば、1922年にファン・ドゥースブルフがヴァイマルの「構成主義者とダダイストの会議」に出席していた事実は、当時の彼のダダイズムへの傾倒を示す一例と言えるだろう。
- 10: バンハムは、この雑誌を1921年を境に前後2期に分けるのが妥当であるとしているが、その根拠の一つとして、この年にメンバーの脱退の波がその極に達したと記している。(バンハム, R.: 『第一機械時代の理論とデザイン』, 石原達二・増成隆士訳, p.218, 鹿島出版会, 1976)
- 11: 連名で投稿されたものについては、その連名を持って1人の寄稿者としてカウントした。また、『編集者』も1寄稿者として104人の中に含まれた。